2024 年度学位記授与式式辞

皆さん、ご卒業、ご修了、おめでとうございます。

春の訪れとともに、キャンパスの桜も蕾を膨らませています。この佳き日に、令和六年度滋賀県立大学・大学院学位記授与式を挙行し、学士五七九名、修士一一八名、博士三名、計七〇〇名の皆さんの栄誉を讃えられることは、本学にとって大きな喜びです。

ご来賓の皆さま、本学の教職員とともに、心よりお祝い申し上げます。参列いただいた保護者の皆さまにもお祝い申し上げます。

皆さんの学年は、新型コロナウイルスの流行、ワクチン接種の開始、感染症法上の分類変更、アフターコロナへの移行といった激動の中で学びを重ねてこられました。こうした試練を乗り越え、自らの可能性を広げてこられた歩みは、これからの人生において貴重な糧となることでしょう。肯定的に捉えるならば、皆さんの世代は唯一、大学四年間の中で二度の夏季オリンピック（東京とパリ）を、しかも日本のメダルラッシュをオンタイムで見ることのできた羨ましい世代でもあります。

さて、本学は「キャンパスは琵琶湖。テキストは人間。」をモットーに、「地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する」人が育つ大学となることを理念としています。そのような本学で学んだことを誇りに思ってください。予測不能なこれからの時代においては、本学での実践的な学びを通じて身につけた「他者への思いやりの心」と、そして「“地”に足のついた専門性」が、これからの人生を切り拓いていく上で皆さんの大きな力となると信じるからです。

昨年の学位記授与式では、エールを込めた皆さんへのメッセージとして、「専門性は皆さんの武器となります。と同時に、弱みともなり得ます。」ということを言わせていただきました。今年も同じメッセージを贈りますが、今回はその意図を説明するために、私たちの身近にある琵琶湖が動いているという現象を例に挙げてみたいと思います。

かつて琵琶湖研究所におられた熊谷道夫先生によると琵琶湖は毎年、約二センチずつ南東の方向に動いているのだそうです。また、湖の両岸では、高島市側の方が彦根市側に比べて南東への移動速度が速いことから、湖の西岸と東岸との間の距離が年々五ミリほどの速さで狭まっているのだそうです。ただし、日本列島の大部分の場所が、琵琶湖より速い、毎年数センチ～十数センチの速さで同じ南東方向へ動いていることから問題はややこしくなります。

頭の中で、この現象をいろんな場所から眺めてみましょう。たとえば、県大近くの東岸から対岸を眺めれば、対岸が近づいてくるように見えるはずです。しかし、西岸から見れば、逆にこちらの東岸が近づいてくるように映ることでしょう。さらに、富士山の頂上から見渡せば、琵琶湖全体が北西方向に遠ざかっているように感じられるかもしれません。

物事の見え方は、立つ場所―つまり“視座” ―によって大きく変わります。この例でお伝えしたかったのは、どの視座も正しい一方で、一つの視座だけでは真の姿を捉えることはできない、ということです。

皆さんは本日、卒業修了されるわけですが、これはそれぞれの分野における専門性、すなわち、専門それぞれによるモノの見方、視座を獲得されたということに他なりません。専門的な視座は大きな武器となる一方、囚われすぎると視野が狭まり、大切なものを見失う危険もあります。大切なのは、狭い視野で

絶対化せず、常に相対化して考える姿勢です。

ひとつの専門性を獲得した、いまだからこそ大切なのは、専門性の強みと落とし穴をよく理解した上で、社会に出てからも自身の中に複数の視点を持てるように知性を磨き続けていただきたいということになります。皆さんが、持続可能な社会づくりの担い手として活躍されることを楽しみにしております。

最後に、この滋賀県立大学は皆さんの母校です。私たち教職員は、いつでも、いかなるときでも、皆さんを歓迎します。本学は、皆さんの人生の一部であり、いつでも温かく迎える『心の故郷』です。迷いや挑戦のとき、この場所が変わらず皆さんを見守っていることを思い出してください。

ご卒業、ご修了を改めてお祝いするとともに、これからの皆さんの前途に幸多きことを祈念して、式辞といたします。

令和七年三月二十日
滋賀県立大学 学長 井手慎司